

西郷隆盛と勝海舟：江戸開城

鹿児島市立玉龍高等学校

第八回卒業 西山和宏

幕末・明治維新の最大の山場は、江戸開城について西郷隆盛と勝海舟の談判であった。その結果としての江戸城無血開城は、日本史上でも特筆される快事であった。

隆盛は主君島津斉彬から才能を見出され、最下級に近い地位から藩全体を動かす地位に引き上げられ、やがては日本の命運を左右するほどになった。

海舟は三代前まで武士ですらない。その父は徳川幕府の最下級の御家人であった。海舟は努力を重ねて幕府の命運を担う地位に累進した。

隆盛は、藩主になった斉彬から藩政に関する意見募集に応募して認められたことから将来が開けた。

海舟もまた、黒船来航で対処に苦慮した幕府が、広く対策を求めたときの応募内容が大久保忠寛の目に留まり、時の老中筆頭安倍正弘に推挙され、将来への道を拓いた。

二人とも意見募集に応募して、将来への道を切り拓いた。

勝海舟は、文政六年（1823年）1月30日、江戸本所亀沢町で、旗本勝小吉の実家である男谷家^{おだに}で誕生した。当時、勝家の禄高は40俵。勝小吉は生え抜きの旗本ではない。小吉の父、海舟の祖父男谷平蔵が勝家の株を買い取って小吉を養子に入れ、勝を名乗るようになった。

海舟の曾祖父銀一は、越後国三島郡長島村の貧農の家に生まれた盲人であった。17歳のころ、青雲の志を立て、杖を頼りに江戸へ出てきたが、頼る寄る辺もなく路傍で苦しんでいるところを奥医師の石坂宗哲（石坂流鍼術創始者）に拾われ、中間部屋に置いてもらった。町役人の手がおよばない幕臣の邸内では賭場がたっていた。

盲人の銀一は、賭場の片隅に座って、博打に負けた者への金貸しで、手持ち300文を短時日で1両2分（6,000文）へ20倍に増やした。この話を聞いた石坂は、別に1両2分を与えて金貸しをさせた。盲人の金貸し（座頭金）は、当時、公に許されていた。

銀一は金貸しに才能を発揮して、巨万の富を築いた。盲人の最高位の^{けんぎょう}検校を手に入れ、男谷家の株を買い取って息子の平蔵に継がせ、自分は男谷検校と名乗った。

これらの話には虚飾もあると思われるが、曾祖父が盲人、男谷家の株を買い取ったことには間違いはない。しかし、銀一が築いたという巨万の富は、海舟の父のころにはない。それどころか赤貧洗うが如しであった。

西郷隆盛と勝海舟による江戸開城の談判は、官軍の江戸総攻撃の前日に行われ、多くの犠牲をともなう戦いを回避した。

江戸の無血開城は維新前夜ばかりでなく、日本の歴史上においても特筆にされるべき快挙である。これにより、欧米の干渉を避け、その後に明治維新の発展があった。

しかしながら、^{はため}傍目には何の障害もなく行われたように見えるほど、静かに穏やかに行われたため、その成果の偉大さほどには高く評価されていない。逆説的に言えば、それほど見事な処理が行われたということである。

問題が起こってから治めるよりも、問題が起らないように手を打つことが上策である。しかし、これの評価は、多くの人々にとって難しい。

明治維新は、激烈な武力闘争によらずに国家権力の移行が行われた。鳥羽・伏見の戦いや戊辰戦争^{ぼしん}はあったが、外国の軍事的干渉の隙を与えるような秩序不在には陥らなかった。これは、江戸開城が、隆盛と海舟によって平和裏に行われた大きな成果である。

2人とも海外事情に通じ、内乱に乗じて外国につけ入られた印度や中国の愚を他山の石とした。



西郷隆盛と勝海舟の江戸開城についての談判の絵

この有名な絵「江戸開城談判」は、^{せいとくきねんかいかん}聖徳記念絵画館に展示されている。縦3尺、横2.5尺と大きなものである。

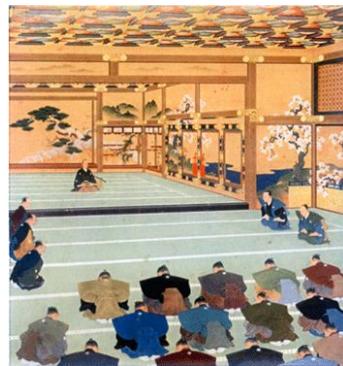
明治神宮外苑（東京・新宿区）は、この絵画館を中心に造成され、ドラマなどの散歩のシーンに使われることが多い銀杏並木は絵画館が美しく見えるように遠近法を用いて植えられている。



維持管理は宗教法人明治神宮の予算で賄われ、他からの援助は受けていない。

絵画館は1926年（大正15年）10月22日に竣工した。

絵画館には幕末から明治時代まで明治天皇の生涯に関する明治時代の歴史「大政奉還」「岩倉大使欧米派遣」「憲法発布式」など教科書でも馴染み深い絵が80点展示されている。



「江戸開城談判」を描いた結城素明ゆうきそめいは1875年（明治8年）12月10日生まれ。

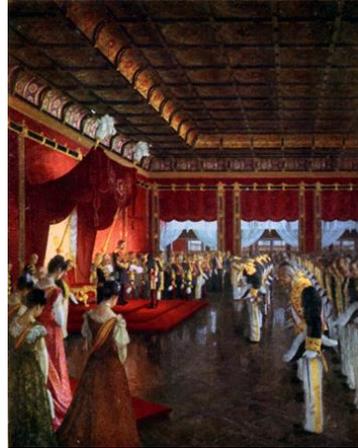
奉納は、西郷吉之助さいごうきちのすけと勝精かつくわしの2人によって行われた。

西郷吉之助は1906年（明治39年）7月20日生まれ、勝精は1888年（明治21年）8月23日生まれで、2人には18歳の年齢差がある。



結城素明の本名は森田貞松（実家は酒屋）、その貞松は勝海舟の命名による。10歳のとき、親戚の結城彦太郎の養嗣子になった。

素明は、東京美術学校名誉教授、帝国芸術院会員、従三位・勲二等瑞宝章受章という経歴の人である。



西郷吉之助は、西郷隆盛の嫡男西郷寅太郎の三男。隆盛の孫で侯爵。西郷隆盛を髣髴させる風貌で人気があった。1936年～1947年、貴族院議員、第2次大戦後は自由民主党参議院議員（4期）として、1968年～1970年、第2次佐藤内閣で法務大臣を務めた。東京・港区芝にある「西郷南洲・勝海舟会見の地」記念碑の銘文を揮毫した。



勝精は、徳川慶喜^{よしのぶ}（15代将軍）の10男として誕生。勝海舟は嫡子小^{ころく}鹿が39歳で早世したため、慶喜と家達^{いえさど}（徳川家16代当主、慶喜の養子）に、精が4歳のとき養子縁組の約束をした。慶喜には正室のほかに側室・妾が複数おり、将軍の座にあるときも、それ以前にも子はなかったが、将軍職を引いた後に子供21人をもうけた。

明治32年1月19日、海舟が死去したとき、11歳の精が、翌20日、急遽、小鹿の娘伊代子の婿として勝家に迎えられた。同年2月8日に家督を相続、伯爵を授爵した。「江戸開城談判」の絵の作者と奉納者は、いずれも南洲と海舟に^{えにし}縁の人である。

ところで、西郷が南洲と号するのは、奄美大島や沖永良部島など南方へ遠島されたことに由来すると唱える人がいるが、私塾おうめいかん嚶鳴館を開いた教育者細井平洲に私淑した西郷が「南（海）の平洲」になりたいという願望からだという説を支持したい。

西郷は、月照の死後、幕府の目から隠すために、大島居住を命じられたとき、細井平洲の講義録おうめいかんいそう「嚶鳴館遺草」をはじめ、通鑑綱目（史書）、春秋左氏伝（史書）、孫子（兵書）、韓非子（春秋戦国時代の思想・社会を集大成したマキャベリの書）、近思録（朱子学きんしりくの入門書）、言志録（指導者のためのバイブル）などを携行した。

上杉鷹山が細井平洲から大きな影響を受けたことが有名であるが、吉田松陰や二宮尊徳なども影響を受けた。南洲は、平洲の思想を実践して人格を形成し、尊敬され慕われるようになった。

勝の号、海舟は妹の夫、佐久間象山しょうざんが書いた「海舟書屋」という額が見事であったので、それからとったと、「氷川清話」で語っている。本名は義邦、鱗太郎ともいった。明治維新後安房守のような国守名が禁じられたとき、とりあえず同音の安芳あわかみとし、戸籍名を確定するとき勝安芳やすよしを姓名とした。

西郷は、幼名小吉、その後、吉之介、善兵衛、吉之助、隆永、武雄、隆盛と名を変え、さらに熊本に先祖があることから菊池源吾、大島に三度やらされて大島三右衛門、また、西郷三助、大島吉之助とも名乗った。本名は西郷吉兵衛隆永たかなが。

王政復古の賞典で位階を授けられたとき、親友の吉井友実よしいともざねが、間違ったって西郷の父の名である隆盛を届けてしまった。それ以降、西郷は隆盛と名乗るようになった。

幕末とは、マシュー・ペリーペリーが来航した嘉永6年（1853年）から明治元年（1868年）までの期間をいう。

ペリー来航による幕末の混乱がなければ、西郷も勝も歴史上に足跡を残す働きをすることはなかった。この2人は、幕末が生み出し、新しい日本を平穏に船出させた英雄であった。

さて、もう一度「江戸開城談判」の絵を観てみよう。西郷は身長179^{センチ}の大男、勝は156^{センチ}と小柄であった。

勝と西郷の談判の絵で、勝のそばに「火入れ（着火具）」と「灰吹き（灰皿）」を入れた煙草盆が置かれている。西郷は下戸ではあったが煙草を好んだ。勝が喫煙者であったかどうかは分からない。

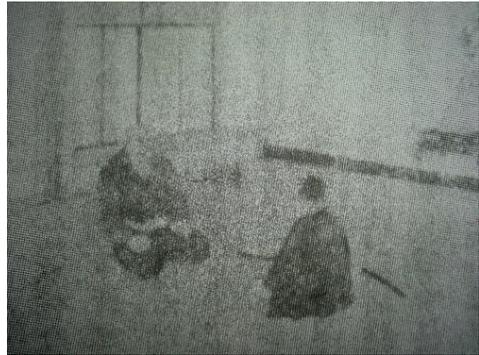
2人に座布団はない。武家が来客に座布団を出すことはない。海舟は細身の刀を左手側に置いている。これは抜き打ち座ぬきうちざと呼ばれるもので、友好的な訪問ではないことの意味表示である。場合によっては、刺し違えて死ぬ覚悟を示している。本当に刺し違えるつもりなら、長刀ではなく、脇差で文字通り「刺す」。刀で斬りつけて命を奪うのは難しい。

抜き打ち座は相手を信用しておらず、いつでも斬り合う用意ありという威嚇である。あまり品のよいものではない。武士道にも悖もとろるものである。また、刀の鐔つばは膝許近くに置き、刀を奪われそうになったら鐔を抑えて、鞘は取られても刀身を手にする。薩摩の示現流では、鐔迫り合いを想定しないため、鐔は通常より小さい。

海舟は、西郷が来る前に通された客間で床の間を背に座った。薩摩屋敷には、海舟を上位の客として遇する雰囲気はなかったはずである。

海舟は、後ろから襲われないように用心している態度をあからさまに床の間を背にしたのかもしれない。いずれにしても、勝の礼を失した着座、刀の位置はまともではないと、不審に思っていた。

果して「黒木弥太郎著、大西郷の遺訓と精神：南洲翁遺訓刊行会」の152頁に、不鮮明ながら西郷と勝が対座している絵の写像がある。同様の写像は「松浦玲著、勝海舟：中公新書」



176頁にもある。

この絵では、2人とも床の間に並行して着座、勝の刀は作法通り右手に置かれている。絵画館の絵の様子は、談判初日に、勝の意気込みを西郷周辺に誇示するためであろうか。それとも、当時の緊迫感を演出するために、あえて、あのように描いたのであろうか。

いずれにしても、通常ではありえない不可解な構図である。あの絵には、秘められた意図があるのであろうか。

さて、海舟は官軍の江戸総攻撃を回避、ひいては徳川慶喜の命と名誉を守るために、相当の覚悟をもって談判に臨んだ。

迎えた西郷の雰囲気は穏やかで、勝の懸念を払拭するものであった。海舟は、温かい対応に包まれ、西郷にますます惚れこんだ。海舟の西郷への惚れ具合は他に類例がないほどであった。

この談判から遙かに後のことであるが、海舟は西南戦争から間もない時期に、朝敵として征討された西郷の碑の建立など、だれもい

いだせないときに、西郷の霊を慰める「留魂碑」を独力で木下川きねがわの浄光寺（東京・葛飾）に建立し、次のように刻した。

.....

ああ君よく我を知れり、しか而して君を知るまた亦我に若くは莫し
地下もし知る有らば、それ將に掀髯まさ きんぜん いっしょう一笑せんか

明治12年6月 友人勝安房しる誌す

海舟は、幕末3剣士の1人、島田虎之助に剣術を学び直心影流剣術の免許皆伝、道場で代稽古を務めるほどの腕前。南洲は脇差を差しているだけ。隣室では、村田新八、中村半次郎（桐野利秋）、渡辺清左衛門（佐賀肥前国大村藩士）などが成り行きに聞き耳をたてていた。

服装は、「氷川清話」に、海舟が羽織に袴、西郷は古い洋服（軍服）とあるが、絵画館の絵では西郷は薩摩緋に白い兵児帯である。

上野の西郷さんの銅像は薩摩緋（井桁文様）。明治になり、陸軍少将桐野利秋や大警視（警視總監）川路利良などは金色燦然たる軍服やかめしい制服を着用するようになったが、権威誇示をはばかりの訪問のとき、例えば、西郷さんをたずねるときには、薩摩緋に白い兵児帯であった。

薩摩兵児が普段から着用していたため兵児帯と呼ばれ、当時、これを締めているのは薩摩人だけであった。明治になり地方出身の書生たちが好んで締め、一種の流行になった。

海舟は5つ紋の羽織に袴という軽装で、馬に乗り供1人を連れてやってきた。武家が玄関から正式に訪問するのであれば、少なくとも袴でなければならない。当時、勝は海軍奉行並みから陸軍総裁

に、さらに軍事取扱いに進み、譜代大名が就く若年寄への就任は固辞していたが、かなりの格式であった。

西郷との談判が公式のものであれば、若年寄で構成する「参政衆」のどれかでなければならなかった。勝は形式的には「参政衆」の下に位置するが、官軍との談判では慶喜から全権を委任されていた。勝のほかには、談判を行える者がいなかった。それほど、幕府には人材が払底していた。

袴とは上半身（肩衣）と下半身（袴）のセットが、共布で作られた着物であることに由来する。袴の上下が共布でない継^{つぎかみしも}袴なら略式の礼装になる。袴は、現代なら上下共布の背広上下というところである。

町人なら羽織に袴は礼装であるが、武家では略礼装。袴は茶または黒地の仙台平など粗い縞地の絹織物が用いられ、無地の袴は略式とされる。明治になって、「五つ紋の黒紋付羽織袴」は太政官令で礼装として採用された。両勢力の代表者が、重大な談判を行うにすれば格式ばった服装ではなかった。

慶応4年（1868年）3月14日、江戸の芝三田薩摩屋敷で、徳川幕府の降伏および江戸開城の条件について、西郷隆盛と勝海舟は談判を行った。



勝海舟

西郷隆盛

2人が平和裏に、ことを運ぶことで合意したことによって、江戸100万市民は戦火を免れた。談判が妥結した3月14日は、官軍が江戸総攻撃と定めていた3月15日の前日であった。

官軍は、3月9日までに、板橋・新宿・品川に集結し、15日には夜明けとともに江戸総攻撃を行うべく官軍の配置は完了していた。

江戸市民は危機一髪で戦火を免れた。これは西郷と勝の世界情勢に関する識見と信頼関係によって成し遂げられたものであった。

江戸は大坂と異なり商業都市ではなく、目ぼしい産業もなかった。当時、江戸の人口構成は武士と町人が半々、合わせて約150万人、武士は幕府や大名から扶持^{ふち}を貰い、商人や職人は直接間接に武士階級に依存した消費都市であった。

そのため幕府崩壊で武士が扶持を失うと、町人も収入の道を絶たれる。かれらが暮らせるように、新しい方法を探さなければならない。勝がこのことを大久保利通に相談すると「それでは遷都を行うことにしましょう」と大久保は応じた。その場には吉井友実^{ともざね}もいた。このような経緯から、江戸が無事であったのは西郷の力、東京が今日繁盛しているのは大久保の力だと、勝は後に語っている。

西南戦争の後も、勝は、時に触れ折に触れ、西郷の人柄と功績を高く評価して世の人々に知らしめた。

また「東京の百万市民が殺されもせずに済んだのは西郷の力で、その後を引き受けて、この通り繁昌^{もとい}する基を開いたのは、実に大久保の功だ。この2人のことをわれわれは決して忘れてはならない」とも、勝は語っている。

しかし、これは大久保が勝の提案を受け入れたように花を持たせたのであって、それ以前に、東の京、つまり江戸を東京と改め、東京への遷都は決定されていた。

西郷と勝の談判は2日間行われた。初日は3月13日正午、高輪の薩摩屋敷で行われた。西郷と勝とは、初対面ではなかった。

西郷と勝の運命的な出会い

4年前の元治元年（1864年）、長州征討について、幕府の態度が明確でなく、征討軍の編成は遅々としていた。そのような状況にあった9月9日、勝は、老中阿部^{まさと}正外に呼ばれて神戸の海軍操練所から大坂にやってきた。阿部は、朝廷、特に夷狄嫌いの孝明天皇から強く求められていた攘夷の約束は、幕府として実行できないことを告げるために京都にきていた。

9月9日夕方と11日朝、阿部は勝を呼び寄せて、京都の状況を話した。長州征討を果した後、長州藩の領地をすべて没収して、朝廷と征長戦参加諸藩で、半分ずつ山分けを薩摩が幕府に提案していることも話した。

西郷は、老中の阿部が長州征討について勝に相談しているという情報を得た。幕府の態度を確認するために、勝の宿泊先へ、西郷は、9月11日、吉井友実、福井藩士の堤五市郎と青山小三郎らとともに訪れ、長州征討について、幕府の方針を問いただした。このとき、勝は西郷と初対面であったが、吉井とは、前年に江戸で会って面識があった。

予想に反して、勝は長州征討がどうこうのと論じているときではないと言った。幕府には日本のことを大所高所から考えられる人物はおらず、幕府の瓦解はもはや避けられないので、明賢諸侯による「諸侯合議」の共和政治に移行すべきだと、勝は西郷に説いた。

勝は西郷に、開国を迫られている日本の行くべき道を教え諭した。西郷は、この会談を契機に、幕府を維持しながらの改革から共和政治を想定した討幕に向かって行動するようになった。

それまでの西郷というよりも薩摩藩の方針は、島津久光の強い意思によって、朝廷と幕府が一体、つまり公武合体によって国難を乗り切るというものであった。

西郷は、その方針をこのときを契機に倒幕による共和政治に転換した。この時期、この方向転換に、久光の了承を必要としないほど西郷の威光は絶大なものになっていた。

それより先の元治元年（1864年）7月19日、前年の八月十八日の政変で京都から追放された長州藩が、会津藩主京都守護職松平容保^{かたもり}らを排除のために挙兵し、京都市中に攻め込み市街戦になった。

これに対して、公武合体を支持していた薩摩藩と会津藩を主力に、大垣藩・桑名藩と新選組も加えて、長州藩を京都から撃退した。これを「禁門の変（蛤御門の変）」^{きんもん はまぐりごもん}という。長州藩が御所に向



けて発砲したため朝敵になった。このとき京都市中の約3万户を焼失した。

このような状況で、西郷は、長州藩を成敗し領地没収という厳しい措置を考えていたが、勝に会って、考えをガラリと変えた。

西郷は、この会談で受けた衝撃は「目から鱗」であったと大久保利通への手紙に書いた。

10月22日、第1次長州征伐の総督の徳川慶勝^{よしかつ}が、ようやく長州を攻める気になって大坂城内で軍議が引かれた。その2日後、西郷は慶勝に呼ばれて長州征伐の作戦を相談され処理を任された。

余談ながら、慶勝は尾張藩 14 代藩主で、15 代尾張藩主徳川もちなか茂徳、会津藩主松平容保かたもり、桑名藩主松平定敬さだあきなどの実兄である。

さて、西郷は、それまでとは考えをガラリと変えて、長州がとにかく恭順の態度を示し、京都出兵の責任者である家老 3 名の切腹程度でよかろうと言い、それを慶勝に了承させて長州征伐は中止になった。西郷の存在は、幕閣を圧するほどになっていた。

西郷と勝は、大坂の会談で肝胆相照らす信頼関係を構築した。それによって、江戸開城の談判が平穏に進められた。この大坂での会談を前段として、後段の江戸での談判は仕上げとして対ついでをなしている。このとき、勝 42 歳、西郷 38 歳、勝は年長であるばかりなく、当時の世界情勢に長じていた。

それから 2 ヶ月後、勝が「諸侯合議」という幕府の権威を失墜させる危険思想を持っていることが、阿部正外に知れ、軍艦奉行から罷免され、神戸海軍操練所は閉鎖された。

このとき行き場がなくなった坂本竜馬以下弟子たちの身の振り方を西郷に依頼した。

竜馬は勝から西郷についてたずねられ「西郷という奴は、わからぬ奴だ。少し叩けば少しく響き、大きく叩けば大きく響く。もし馬鹿なら大きな馬鹿で、利口なら大きな利口だ」と答えた。



西郷に及ぶことができないことは、大胆識と大誠意で、それに圧倒され謀術策を用いて欺くことができなかつたと勝は語っている。

このようなことがあって、江戸開城の談判は行われた。